

平成22年 5月12日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20820056

研究課題名（和文） 銅鏡の受容からみる舶載文物への適応と古墳時代社会の特質

研究課題名（英文） Correspondence to seaborne articles and Feature of society in Kofun Period from the viewpoint of receipt of the bronze mirror

研究代表者

岩本 崇（IWAMOTO TAKASHI）

島根大学・法文学部・准教授

研究者番号：90514290

研究成果の概要（和文）：日本列島の各地の博物館などに収蔵されている銅鏡を実見して、データベースの作成をおこなった。製作技術という観点から、銅鏡を比較し、銅鏡には製作技術の違いに基づく差があることを具体的に示した。また、出土状況や出土古墳の規模や分布を検討し、系統ごとで日本列島における流通形態が異なること、副葬方法についても相違があることを指摘し、銅鏡に対して多様な生産・流通システムが存在した可能性を述べた。

研究成果の概要（英文）：I observed the bronze mirror stored to the museum, and made the data base. Moreover, I concretely showed that bronze mirrors were compared, and there was a difference based on unlike the fabrication technology in the bronze mirror from the viewpoint of fabrication technology. In addition, I pointed out that it was examined the ideal way of the excavation, different the circulation form in the Japanese Islands because of each settlement of the mirror, and there was a difference about [houmuhouhou] at the vice. And, I described the possibility where various production and the circulation systems existed for the bronze mirror.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,150,000	345,000	1,495,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,150,000	645,000	2,795,000

研究分野：考古学

科研費の分科・細目：史学（考古学）

キーワード：銅鏡、古墳時代、対外交渉、舶載文物、倭鏡

1. 研究開始当初の背景

ある器物が社会において受容される背景には、その器物が社会的に一定の役割を果たした可能性を考慮しうる。とくに器物の生産

と展開には、社会をとりまく状況や社会そのものの特質が鋭敏に反映されると想定でき、そこにその器物を許容した時代性を垣間見ることができる。とりわけ、古墳と

いうモニュメンタルな構築物が列島の広域で出現する背景を考察するうえで、同じ様に広域に分布する列島内で生産された器物の生産の展開を把握することは、きわめて意義深いものといえるだろう。

なかでも、古墳時代の国産鏡すなわち倭鏡は、器物の受容のあり方や社会の動向に迫るうえで、きわめて有効な対象になりうると考える。その理由としては、第一にどの形式の銅鏡でも基本的な形に極端な違いがなく、器物として強いまとまりを有していること。第二に中国大陸からの輸入品を模倣することを原則としているために、列島独自の要素を見つけやすく、社会の舶載文物への対応のあり方を認識しやすいことをあげることができる。本研究では、こうした社会の鏡への特徴的な対応のあり方をふまえて、原始・古代日本社会において器物が受容される過程と背景について考察を試みたい。

いっぽう、倭鏡の先行研究を具体的に紐解けば、生産にかかわる研究はおもに眼に着きやすい図像文様から分析が進められてきたと要約できる。しかし文様は、輸入品の模倣を起点として製作されはじめた倭鏡の分析には、必ずしも適していない。なぜなら、文様の変異は一樣であるとは限らず、たとえば、それを配するスペースといった、物理的な制約などの機能面以外の要因で容易に変化する。鏡の直径に大小の差がきわめて顕著な倭鏡の場合、文様を配するスペースなどの影響は決して小さなものではないはずである。また、流通や消費という点において、倭鏡は文様の差よりもサイズの違いが重視されていたという指摘がある。しかし、そうした指摘がある一方で、従来の生産面における研究でサイズが具体的にとりあげられたことはない。倭鏡には多彩なサイズとデザインとがあり、資料の観察を重ねてゆくと、一定のサイズをもち、かつ一定の文様をもつ複数の倭鏡は、形態的にみても共通点が多い。そうした共通点の背景には規範のようなものが存在した可能性を考慮できる。ここに、サイズの違いを考慮した「かたち」の違いによる倭鏡生産にかんする分析の必要性をみいだすことができる。

さらに、私はこれまで古墳時代銅鏡としてもっとも数量の多い三角縁神獸鏡を材料に、さまざまな観点から検討を重ねてきた。そのなかで、形態の異同に基づく分析が銅鏡研究において一定程度の有効性をもつことを説いた。倭鏡についても従来からの文様による検討だけでなく、形態や大きさという異なる視点からの検討は十分に可能であり、そうした視点から倭鏡製作の特質に迫ることはむしろ必要な基礎作業と考える。

また、三角縁神獸鏡については、出土古墳の特徴や副葬配置の異同などから、その流通

や消費についても分析を進めてきた。同様の手法によって、倭鏡の分析をおこなうことはきわめて実現性が高いと考えており、三角縁神獸鏡の分析によって得られた成果と対比することで、倭鏡・三角縁神獸鏡の双方の特質をより鮮明に浮き上がらせることができると考えている。

なお近年、三角縁神獸鏡をベースにそのほかの副葬品や埴輪の年代を組み合わせることによって、古墳時代そのなかでもとくに前期の時期区分を試みた研究が示された。しかし、そうした時期区分案において、現状の倭鏡の年代観を優位に使用できないことがいっぽうではみとめられている。この点を検証することも本研究を実施する理由の一つである。

2. 研究の目的

日本列島では古墳時代において、対外交渉によってもたらされた銅鏡を模倣して、数千面におよぶ倭製の鏡（以下、倭鏡）が生産された。この倭鏡にはさまざまな大きさとともに、多彩なデザインがある。本研究の第一のねらいは、倭鏡のサイズとデザインがいかなる製作原理のもとで生み出され、倭鏡生産がどのように展開したのかというメカニズムを、舶載文物への適応という観点から説明することにある。第二に、単に倭鏡の年代論にとどまることなく、その生産から消費に至る過程を分析することで、倭鏡以外を含む銅鏡という器物が古墳時代において果たした社会的役割の諸相を、祭祀や葬送儀礼の場などの実践的な側面から明らかにする。そのうえで、原始・古代日本社会が舶載文物である銅鏡を受容し、列島内で生産するに至った適応の背景とその時代性を探ることをめざす。

3. 研究の方法

本研究では、上述の研究目的を遂行するために、具体的には以下の研究を実施する。

倭鏡の製作原理 倭鏡をサイズとデザインの違いから、「鏡群」に区分する。具体的には、倭鏡のもっとも大きな特徴のひとつである直径の差と、形態差がどのように対応するのかをまずは把握する。あわせて、「鏡群」と文様モチーフとの対応関係についても検討し、サイズとデザインがどのように割り振られて製作されていたのかを明らかにし、模倣の対象となった中国鏡との共通点や差異をふまえて倭鏡の製作原理に迫る。つぎに、「鏡群」を型式学的な観点から検討し、その時間的前後関係、併行関係を明らかにする。検討に際しては、形態差を生み出すに至った挽型の違いなど製作技術的な側面も重視する。さらに、倭鏡生産の展開を跡づけるとと

もに、生産の画期と生産面における特質を導出し、東アジアにおける社会変動とのかかわりについても検討する。

銅鏡の社会的意義と社会の舶載文物への適応 時間的前後関係と時間的併行関係を把握した各「鏡群」が、どのような性格をもつ遺跡から、どのような状態で出土するのかを検討する。この検討によって、倭鏡諸「鏡群」の流通から消費に至る過程の特徴を時間の流れのなかでとらえる。さらに、これまでに実施した三角縁神獸鏡などほかの鏡の分析結果と比較して、鏡と人間集団のかかわりという視点から倭鏡ひいては古墳時代銅鏡の社会的な意義について論及を試みる。そのうえで、原始・古代日本社会が舶載文物の受容にたいしていかなる適応を果たしたのかを探り、当該時期の社会の特質に迫る。

平成20年度については、研究実施初年度ということもあり、まずは倭鏡についてデータの集成、カード化を実施した。当初予定の範囲については、ほぼカード化・データベース化を完了した。あわせて、さらなる情報収集が必要と考えた資料については、実物資料の閲覧をおこない、写真撮影や図面の作成などを進めた。できるだけ多数の銅鏡を一括して出土した古墳を対象を限定し、さらに重要な資料を数多く所蔵する機関を訪問することで、効率化を図った。こうした資料収集の過程で蓄積した、とくに断面図は、研究目的である倭鏡のデザインと大きさの関係性に迫るうえではきわめて有効な材料となりうる。さらに、平成20年度に作成したデータベースをもとに、全国各地の博物館や資料館、大学、教育委員会などで保管されている資料を可能な限り実見し、写真や図面による記録を進めた。研究機関の変更が生じたため、当初予定のすべてについて資料化を実施することはできなかったが、研究を進行するうえでの支障が出ないように配慮しながら、重要資料を重点的に調査した。

こうして得られたデータベースをもとに、さまざまな銅鏡を文様・形態・製作技術から比較検討し、系統的な整理を試み、諸系統の特徴を抽出した。

さらに、系統ごとによりいかなる流通・使用(副葬)がなされていたのかを検討し、日本列島における銅鏡の受容のあり方を総合的な視点から考察した。

4. 研究成果

上述の方法をふまえた研究成果は、大きく2つに整理できる。1つは、銅鏡の系統と製作技術にかかわるものであり、いま1つはそうした銅鏡の諸系統がどのように列島内で受容されていたのかという点にかかわるものである。

前者は、製作技術という観点から、漢鏡、三国鏡、倭鏡について比較検討することで抽出することを試みた。結果として、銅鏡の諸系統にみる製作技術の特徴をこれまで以上にはっきりとあぶりだすことが可能となり、従来あまりふれられることのなかった、銅鏡の製作技術をかなり整理することもできた。とりわけ、倭鏡にかんしていえば、同時期の中国鏡との文様の・技術的な共通点はきわめて乏しく、系統的なつながりはみいだしえない。文様については、古墳時代前期前半までに列島に流入した銅鏡の部分的要素をさまざまに改変させ、形態については大まかに大きさによる作り分けをおこなう。時間的な変異のあるいっぽうで、作り分けがなされており、とりわけそれは鏡のサイズによるところが大きいことを明らかにした。ただし、同時期において、東アジア全体をみても、日本列島の銅鏡の製作技術は異質である。倭鏡の製作技術がいかなる系統に属させうるものであるかを明らかにすることが、今後の大きな研究課題となるであろう。

後者の問題については、具体的な地域研究を実施することでアプローチした。そのケーススタディは、東海地方と西播磨地域であるが、それぞれの地域における銅鏡の受容のあり方と、古墳の展開の様相について考察を試みた。その結果、銅鏡に対して多様な生産・流通システムが存在した可能性を指摘するに至った。

また、古墳出現期において銅鏡の授受に際していかなる実態を想定しうるかを、地域における古墳の異同から説明することを試みた。とくに、三角縁神獸鏡が一元的な授受によって各地に分配されながらも、出土古墳にみる多様性が存在する背景として、前方後円墳成立期においては、王権と地域とのかかわりがあくまでも文物の授受を基軸としたものであったという事情を想定した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ① 岩本崇、茶すり山古墳副葬鏡群の位置—製作技術にみる銅鏡の系統性を中心に—、史跡茶すり山古墳、査読無、2010、全21(予定)
- ② 岩本崇、古墳時代前期における地域間会計の展開とその特質、龍子三ツ塚古墳群の研究、査読無、2010、399-432
- ③ 岩本崇、三角縁神獸鏡と前方後円墳出現期の社会、比較考古学の新天地、査読無、2010、300-309
- ④ 岩本崇、筒形銅器・巴形銅器の製作技術、

- 考古学ジャーナル、査読無、570、2008、11-152
- ⑤ 岩本崇、三角縁神獣鏡と東海地方の前期古墳、東海の古墳風景、査読無、季刊考古学別冊 6、2008、14-22
- ⑥ 岩本崇、三角縁神獣鏡の生産とその展開、考古学雑誌、査読有、92-3、2008、1-51

〔学会発表〕(計4件)

- ① 岩本崇、古墳と鏡の副葬—中国鏡を中心に—、平成21年度島根県教育庁埋蔵文化財調査センター講演会 古墳と鏡—その役割—、2009年12月12日、島根県職員会館
- ② 岩本崇、交野ヶ原の銅鏡と古墳時代前期、歴史シンポジウム 交野ヶ原の前期古墳、2009年11月7日、枚方市立メセナ枚方会館
- ③ 岩本崇、山陰の古墳と鏡—三角縁神獣鏡を中心として—、第37回山陰考古学研究会 会、2009年8月29日、米子市福祉保険総合センターふれあいの里
- ④ 岩本崇、古墳時代前期における地域間関係の一例、第74回日本考古学協会総会、2008年5月25日、東海大学

〔図書〕(計3件)

- ① 岸本一宏・岩本崇・加藤一郎・千葉太朗ほか、兵庫県教育委員会、史跡茶すり山古墳、2010、全1320
- ② 岩本崇・河野正訓編、大手前大学史学研究所・龍子三塚古墳調査団、龍子三ツ塚古墳群の研究—播磨揖保川流域における前期古墳群の調査—、2010、全700
- ③ 岩本崇・土屋隆史・金字大・河野正訓・奥山貴・細川晋太郎、大手前大学史学研究所・龍子三塚古墳調査団、龍子三ツ塚古墳群の調査、2009、2・7

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩本 崇 (IWAMOTO TAKASHI)
島根大学・法文学部・准教授
研究者番号：90514290

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：